

八戸、運動部初の中学合同部活動 八学大陸上部員が指導



八戸学院大の陸上部員(手前)からハードルを越える動きを教わる中学生たち=16日、八戸市東運動公園陸上競技場

公立中学校の休日部活動を地域団体などに委ねる「地域移行」へ向け、八戸市教委は16日、市東運動公園陸上競技場で運動部の合同部活動を初めて試行した。10月の文化部系に続き、今回は陸上部が対象。八戸

学院大の陸上部員が指導し、学校の負担軽減、中学生の知識・技術習得のみならず、大学生の指導経験を兼ねた「三方よし」を実現し得る取り組みとなった。市立中学校16校の陸上部員約200人が参加。短距離走、中長距離走、ハードル走、走り幅跳び、走り高跳び、砲丸投げの6種目に分かれて、大学生の指導を

受けた。3時間にわたり種目ごとの体の動かし方やトレーニング方法を学び、普段とは異なる練習相手との交流を楽しんでいた。

短距離走の指導を受けた市立白山台中2年の木村壮秀さん(13)は「苦手だったスタートを教わることで、参考になった」と充実した表情。高校の教員を目指す同大3年の工藤敬輝さん(21)は「生徒を指導する経験ができるのはありがたい。今後も中学生の実力を伸ばす手伝いをしたい」と話した。

市中部連陸上競技委員長を務める市立白山台中の山田五月教諭(42)は活動を見守り、「刺激や緊張感に加え、大学生のコーチがいることで目的意識を持った練習もできる」とプラスの効果を実感した様子。

一方で、地域移行へ向け「中学生がけがをした時の対応や保険をどうするかを考えなければいけない。継続するなら指導する大学生の負担も考慮する必要がある」として、学校から切り離れた受け入れ体制構築のハードルを指摘した。(上條哲洋)